7月「Nur auf dem Lande」
アントニア・シュルト

1.この小林に来てもうすぐ2年になります。「あっという間」といった表現が思い浮かんでくるほど、ありえないスピードで時間が経っています。先日、母に電話して、このことを話したら「甘い！これからもっと早くなるよ」と笑われました。読んだ記事の中で「30代、40代は人生の「ラッシュ・アワー」と書いていました。「ラッシュ・アワー」とは、交通が混雑している時を指し、東京の地下鉄のイメージが勝手に頭の中に現れてきます。白いグローブをはめている係員が人を一生懸命車内に押し、日本についてのドキュメンタリーによく出る外国人にとって少し不思議なシーンです。

7月「Nur auf dem Lande」
アントニア・シュルト

2.とにかく、「ラッシュ・アワー」をいいこととして捉える人はほとんどいないと思います。私にとって地獄に近い状況です。話は少し変わりますが、もう新人だとは言えない私に、小林の市民が相変わらず、興味を示し、気軽に声をかけたり、質問したりしてくれます。小林市民の開放性は最初から好きでした。人気の質問トップスリーと言えば、「お国はどこ？」、「日本はもう長い？」、「なんでこんな田舎に？」となります。最後の質問について説明したいと思います。

7月「Nur auf dem Lande」
アントニア・シュルト

3.まずは、JETプログラムに申請したとき、ドイツ人を受け入れるポジションは10か所ありました。大阪で交換留学をした私はその時からずっと西日本を大事にしていて、西日本で働きたいことを前提として、ユーチューブなどを使って、それぞれを調べ、希望を三つ書きました。その中に宮崎県も入っていました。どうやって選んだかというと、ユーチューブに載せた地方の動画を観て、一番緑が多いところにしました。最後の判断はJETプログラムを行う自治体国際協会にあったため、私自身が小林を積極的に選んだとは言えないかもしれませんが、ここにきて、小林になったことを一度も後悔したことがないです。むしろ、毎朝、霧島の雄大な山々を見て、心まで広がってくるような気がして、感謝で溢れてきます。

それこそ、先日、いい場所を教えてもらいました。犬と家族を連れて、素晴らしい一時を過ごしました。知る人ぞ知るとも言え、少し辺鄙なところでした。滝もありました。まったくの気まぐれで、その滝の下に立ってみたくなりました。すると、思わず、上を見上げてみました。日差しに当たった数え切れない水の玉が屈折され、円形の虹になりました。びしょびしょになっていたことをあまり気が付かずに、上を見ながら私は滝の下に立っていました。言葉によくできず、神秘的なひとときでした。

7月「Nur auf dem Lande」
アントニア・シュルト

4.なぜこんな田舎がいいかというと、人間が手を入れていない自然、そのままの自然、本当の自然がここは豊かためです。道もなく、手すりもなく、人が来ないような私だけの自然が退避地となり、私の人生に欠かせないものです。田舎のくせにではなく、田舎だからこそ、田舎しかできない人生が送れ、恵まれています。